慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	手紙文を産出する方略の発見と分類
Sub Title	A study on production of the letter
Author	伊東, 昌子(Ito, Masako)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1986
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.26 (1986.) ,p.1- 9
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000026-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

手紙文を産出する方略の発見と分類

A study on production of the letter

伊　東　昌　子
Masako Itoh

Two experiments were designed to investigate internal processes in writing a letter. At first, letter production processes were hypothesized. In experiments, college students wrote letters with reading a given content to different addresses and were interviewed what he or she thought before and during writing. The first experiment showed that policies and plans were decided on the basis of the addresee and that phrases and characters on a letter matched strategies taken in that address. In the second experiment, to find the strategies more precisely, writing time was limited so that writers might make any plan before beginning to write. As a result, thirteen kinds of strategies including those in the first experiment were identified and they refined the letter production processes assumed first. Some of srategies were often used in combination. It was discussed that social relations and a reader-image had the strong framework effect on writing a letter.

私たちが文章を書くとき，何を書こうか，どんな表現にしようかと思い悩むことを考えると，文章表現については，その内容的側面（内容の展開，話の筋）と形態的側面（文章の形態，認句，表記形態など）が区別できよう。内容的側面に関しては，子どもが作文を書く過程や物語を創る過程の研究が精力的になされ，書き手が用いる作文産出方略や内容を構成するための手続的知識が明らかにされてきた（安西・内田，1981；内田，1982）。一方文章の形態的側面については充分に研究されているとはいえない。そこで伊東（1985）は手紙文の産出課題を用いて，主に表現の形態的側面とその産出方略に焦点をあてた研究を行なった。

手紙文の場合，読み手が特定されるばかりでなく，その読み手に直接語りかける文章を書くことが要求されるので，表現の産出に宛先が強く影響すると考えられる。そこで手紙文産出過程として以下のＰ１－Ｐ８が仮定された。

Ｐ１　「宛先人のイメージ想起」：宛先人との社会的・心理的関係や宛先人の人物像が想起される。

Ｐ２　「基本的表現方針の設定」：宛先に基づき，基本的表現方針が決められる。

Ｐ３　「表現形態プラン」：基本的表現方針に基づき表現形態プランが立てられる。

Ｐ４　「局所的表現形態プラン」：手紙文を書いている途中で次の表現のプランが立てられる。

Ｐ５　「探索」：上記２つのプランに基づき関係知識の探索が行なわれる。

Ｐ６　「表現産出行為」：探索された表現が産出される。

Ｐ７　「評価」：産出された表現はプランに基づいてその妥当性が評価される。

1）本研究の一部は，日本基礎心理学会第１回大会，日本心理学会第47回大会，日本心理学会第48回大会において発表された。
2）本論文の作成にあたり，懇切な御指導を頂きました慶應義塾大学文学部小谷津孝明教授に厚く感謝致します。

P 8 「修正」：表現が適切でないと判断された場合には修正される。

以上の過程を経て産出された手紙文の表現形態は，構造，語句，表記などの点において，宛先によって差が認められるであろうこととその差は用いられた方略の差によることが予想される。また局所プランについては常にそのモニタリング機能（安西・内田，1981）が働いているならば，それは修正例に現れるであろう。伊東(1985)は上記の過程と予想に基づき，手紙文の構造・語句・表記や修正例を内観報告（プロトコル）と併わせて分析することによって，手紙文産出方略に社会的枠組がどのように影響するかを検討した。

本論文では，実験 1 において宛先に特有の表現形態を詳しく示し，それらとプロトコルから使用された方略を推定する。実験 2 においては主にプロトコルの分析方法の詳細とそこから推定された方略の集合を提示する。

実　験　1

書き手が手紙文を書くときに何を考慮したかについての内観報告を宛先別にとり，そこで使用された構造，語句，表記を明らかにし，どのようなプランや方略が用いられているかを推定することが本実験の目的である。

方　法

被験者　慶應義塾大学学部生と院生，男子10名。

刺激　Table 1(a) に示す内容メモと宛先カード 6 枚。内容メモは日本語の表現から極力自由なものにするために英文表記とした。メモには新婚旅行一日目の出来事とそれらの出来事に伴う書き手の感情がその生起順に記されている。宛先は媒酌人（書き手の会社の課長），同僚（同年代の先輩），親しい友人，両親，甥（兄の子で小学 3 年生。普段よく遊んであげている），書き手自身（書き手が後日見るため）とし，宛先カード上には宛先と宛先の人物名が記されている。

手続　実験は個別に行なった。被験者はまず手紙を書くときの設定についての説明を受けた。設定は「あなたは大学を卒業して就職し，一年あまりたって結婚した。昨日結婚式をすませ今朝新婚旅行先のハワイに着いた。今はその日の夜である」とした。この後被験者は英文メモを渡され，それを見ながら手紙文を書くよう教示された。続いて最初の宛先が指定され，被験者はその宛先へ出す手紙文を便せん上に作成した。6 つの宛先が指定される順はランダムである。各手紙文を書き終えた時に，被験者は手紙文を書くにあたって気をつけた事についての報告を求められた。なお必要な場合には国語辞典の使用を許可した。消しゴムは使用させなかった。

結果と考察

1.　プロトコルから推定された方略

プロトコルを宛先別に Table 2 に示した。特徴的なプロトコルとそこから推定されるプランや方略について，まず媒酌人宛や甥宛における「上司だし媒酌人をやって

Table 1.　新婚旅行一日目の出来事のメモ　(a) 実験 1；(b) 実験 2

(a)	(b)
arrive Honolulu : 10 : 30	Arrived at Honolulu 10 : 30
no accident in flight	No accident in flight
Hotel SHERATON	Now stay at Hotel SHERATON 5 min. away from WAIKIKI
room with ocean view	Beautiful ocean view from the window
5 minutes to WAIKIKI	Went to the beach in the afternoon
go beach : afternoon	And become brown for the strong sunlight
suntan in a day	In the evening, took a walk amidst the fascinating sunset
beautiful sunset glow	And met American couple also walking side by side
American guy become friend	Introduced ourselves, saying "Omedeto gozaimasu" in Japanese
"Honney moon from Japan"	We had dinner at SHOGUN together
"Omedeto gozaimasu"	Fully satisfied with good seafood
surprised	And tropical cocktails served there
dinner at SHOGUN	Everything so nice, so happy
good seafood dishes	We shall never forget it forever...
colorful tropical cocktails	
have happy time	

Table 2.　各宛先で得られたプロトコル

宛先	プロトコル	人数 (max=10)
媒酌人	失礼のないように	5
	儀礼的に書こうと思った	1
	上司だし，媒酌人をやってもらったから失礼のないように	1
	失礼にならないよう言葉使いに気を使った	3
同僚	失礼のないように	4
	敬語を使わなきゃと考えた	2
	(気をつけたところは) 特にない	4
両親	(気をつけたところは) 特にない	10
友人	(気をつけたところは) 特にない	10
甥	子どもだからわかりやすく書こうと	3
	どの程度のことが理解できるかなと考えた	1
	難しい漢字は使わない	4
	なるべくかなで書くように	2
	漢字をどうしようかと思ったが，親が読んでくれるからいいや (気を使わない) と思った	1
書き手	(気をつけたところは) 特にない	5
	メモでいいと思った	4
	特にない，自分がわかればいいから	1

もらったから失礼のないように」や「子どもだからわかりやすく」は宛先人が読んだときの印象を予測して表現方針を決めるという方略を示す。同僚宛の「敬語を使わなきゃ」は宛先人との社会的関係に基づく表現形態プラン，甥宛の「なるべくかなで」は甥の読解能力を考慮した表現形態プランであろう。その他の宛先における「気を使った点は特にない」は宛先に基づき表現には特に気を使わないで書くという方針をとったと考えられる。

2.　表現形態

(1)　手紙文の標準的構造と常套語について

手紙文には通常の手紙文にあるように起首，前文，末文，結語が加えられていたが，これらの整序のされ方は宛先によって異なっていた。Table 3 に示すように媒酌人宛と同僚宛では手紙文の典型的な構造だけでなく手紙文の常套語（例えば拝啓—敬具）も整っていた。一方その他の宛先では前文や末文が省略されがちであるばかりでなく，起首に「父さん母さん」(両親宛) や読み手の名前（友人宛・甥宛）が用いられ，結語には会話的な「じゃまた」「さよなら」などが使用されていた。読み手が書き手自身である場合は，Table 2 にあるようにすべてメモ形式であった。

(2)　語句　語句についても宛先間で差が認められたが，それらは以下の2種類が区別された。第1に宛先が大人の場合，儀礼的な語句や敬語が使用されているか日常会話的な語句が使用されているかの違いである。例えば媒酌人宛と友人宛における感謝の表現を Table 4 に示したが，媒酌人宛では「……して頂き感謝の念に絶えません」に代表されるように丁寧であるばかりでなく著しく儀礼的であるのに対して，友人宛では「……してくれてありがとう」と平常の表現になっている。さらに各文の語尾が，媒酌人宛，同僚宛，両親宛ではすべて「です，ます」調であり，特に媒酌人宛では8名が「……へ参りました」「……致しました」「……ております」などの謙譲語を使用していた。一方友人宛では「だ」調の語尾になっている(8名)。第2に甥宛のみにみられる語句の易

Table 3.
宛先別にみた手紙文の構造（手紙文数）

手紙文の構造	媒酌人	同僚	両親	友人	甥
前文と末文がある	10	9	4	8	6
起首や結語が手紙文の常套語	6	5	1		
起首や結語が日常的会話用語			3	5	3
起首や結語が省かれている	4	4		3	3
前文あるいは末文が欠如している			4	1	2
起首あるいは結語に相当する語のみ存在する		1	2	1	2

Table 4.　媒酌人宛と友人宛における御礼および感謝の表現（Sは被験者）

媒酌人宛

S 1；先日はお忙しいところ　私達の媒酌をしていただき　どうもありがとうございました。おかげさまで大変立派な式をあげることができ，家族一同，感激致しました。

S 2；結婚式と披露宴で，大変御世話頂きましたこと本当にありがとうございました。課長御夫妻の御媒酌によりまして，私たち二人が新しい人生を出発することができましたこと心から感謝しております。

S 3；媒酌をお願いして以来　多くのお世話を賜り有難うございました。

S 4；いろいろとお骨折りいただき，本当に有難う御在居ました。美紗共々，感謝に堪えません。

S 5；この度は何から何までお手数をおかけしまして妻共々本当に感謝しております。

S 6；此の度は，私と妻の結婚に関して過大の御世話を戴き，感謝の念に絶えません。

S 7；先日の結婚式の際には，媒酌人をつとめていただき妻ともども感謝しております。

S 8；先日は御多忙のところ誠に有難うございました。おかげ様で私も人生の新しい局面に一歩を踏み出せます。

S 9；この度は，誠にありがとうございました。

S10；その節は大変おせわになりました。

友人宛

S 1；先日は私達の結婚式に出てくれてありがとう。

S 2；結婚式の時は，ありがとう。

S 5；お見送りありがとう。

S 7；結婚式の時は，わざわざ来てくれてありがとう。美紗も喜んでいた。

S 9；式に出てくれてありがとう。司会をしてくれてありがとう。

（S3, S4, S8, S6, S10には，お礼の直接的な表現はない。）

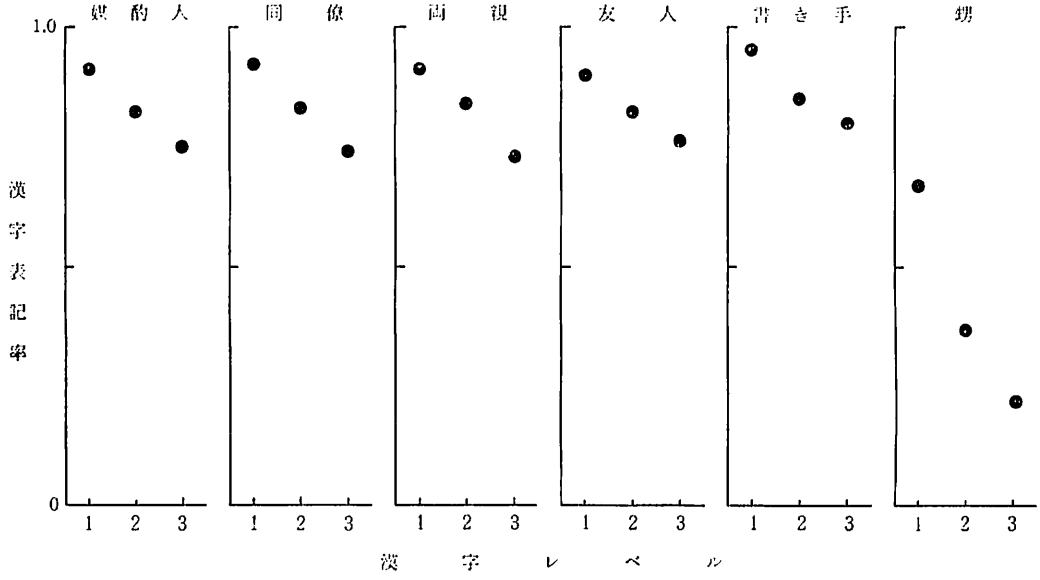

Fig. 1.　宛先別漢字表記率，実験 1

（漢字レベル 1：小学校3年生までに習う学習漢字，レベル 2：4年生から6年生までに習う学習漢字，レベル 3：その他の漢字）

しさである。内容メモの単語に対応する表現が甥宛では他の宛先より具体的でわかりやすい語句になっている。例えば“seafood”は大人が読み手の場合は「魚貝類」「海の幸」「海鮮料理」「シーフード」などが使用されているが，甥宛では「さかなやえび」「おさかなやかい」などの語句になっている（9名，うち1名はさかなとえびの線画を使用)。

以上示してきたように，構造や語句が各宛先に適したものであることは，とられたプランや方略の違いによるものと考えられる。

(3) 漢字とかなの割合　宛先毎に漢字表記率（漢字表記が可能な語をすべて漢字表記した場合の漢字数に対する使用漢字数）を漢字レベル別にしてプロットするとFig. 1 のようになる。レベル1は小学3年までの学習漢字，レベル2は小学4年から6年までの学習漢字，レベル3は学習漢字以外のものである。同図に示すように宛先が甥の場合においてのみ漢字表記率が極めて低くなっており，それ以外の宛先による漢字表記傾向の差は認められない。宛先と漢字レベルを要因とした分散分析では主効果として宛先と漢字レベルに有意差が認められ（各々，$F(5,30)=32.92$，$p<.01$；$F(2,12)=10.57$，$p<0.1$)，両者の交互作用にも有意差が認められた（$F(10,60)=2.50$，$p<.25$)。漢字レベルにおける差は，それがすべての宛先で同じ傾向にあることと手紙文が同一メモを基にしていることから，主にメモ内容に起因すると考えられる。一方宛先による差は，前述のプランから考えても書き手が甥宛にはレベルの高い漢字の使用を避けたことによると思われる。また「わかりやすく」という方針に合った結果として10名中2名が振り仮名を用い，1名が文中の動詞，名詞などに線画と振り仮名（カタカナの場合もひらがなの場合もあった）を併用した表記を用いていた。

以上の結果から，宛先に適した構造，語句，表記を産出するため，宛先人との関係や宛先人のイメージを考慮して表現方針や表現形態プランが立てられていることが推察された。

実　験　2

実験1で得られた結果を確認するためには充分な数の表現方針や表現プランが発見されることが望ましい。このためには，手紙文を書き出す前にそれらについての配慮が充分に行われればよい。そのためには手紙文の産出時間をできるかぎり短く制限することが考えられる。この条件において得られたプロトコルの詳細な分類を試みる。なお前実験では局所プランについての情報が得られなかったが，上記のような制限された条件では局所プランが誤りや修正として現れることが期待される。

方　法

被験者　慶應義塾大学学部生で実験1に参加していない男子10名，女子9名。

刺激　Table 1(b) の英文メモと実験1で用いた宛先カード6枚。本実験で用いたメモは，手紙文を作成する時間を制限することから，内容の産出と展開に係わる認知的負担を最小にするため，実験1と基本的に同じ内容であるが出来事間の関係がより詳しく，しかも文法的に整備されている。

手続　予備実験より手紙文作成時間は10分と教示したが，途中で打ち切らせることはない。開始合図と同時に宛先カードを渡し，その合図から被験者が書き始めるまでの時間を測定した。実験者は被験者が各手紙文を書き終えた時点で，書き始めるまでにかかった時間を示しその間に何を考えていたかについての報告と，途中考えたことについての報告を求めた。本実験では漢字を使いたいが思い出せない語には下線をひくように教示した。その他の手続きは実験1と同様である。

結果と考察

1.　プロトコル分析

プロトコルは243例得られた。それらのプロトコルは下記の方法で方略が推定された。まず先に仮定したP1—P8の過程を知らない2名の判定者（Y.I.とF.M.）が表現すべき内容と宛先を考えあわせながらプロトコルから推定される方略を各自判定した。いま友人宛を例にとると，Y.I.の判定した方略は Table 5 のようになる。このようにしてすべての宛先で判定された方略を総合した結果，合計13種類の方略が認められた。それらの方略を基準とした両判定者の一致率の平均は83%であった（媒酌人82%，同僚79%，両親75%，友人89%，甥84%，書き手91%)。

次にそれらの方略は幾つかのクラスタを形成していると考えられたため，著者がそれらを推定した結果，「イメージ生成」，「表現態度設定」，「プラン」，「検索」の各カテゴリと10の下位カテゴリに分類できた。カテゴリ名，その定義，そこに分類された各宛先におけるプロトコル例を Table 6 に示した。先述のP1，P2，P3，P4，P5 の過程はそれぞれ，同表内の宛先人のイメージ生成 (Ir)，手紙文のイメージ生成 (It)，表現形態プラン (Ps)，局所プラン (Pl)，探索 (R) に対応づけることができる。Ps については，さらに手紙文の形式，言葉使い，語彙

Table 5.　友人宛におけるプロトコルとそこから Y. I. が推定した方略

プロトコル	方略
仲のいい友だちかと（考えた） どの程度の友人にしようかと どの程度親しくしようかと考えていた 友人の人物像を考えた 実際の友人の一人を思い浮べていた 友人の具体的パーソナリティを考えた 結婚しているかなあと考えた	宛先人のイメージを浮かべている
おもしろいものにしちゃおうと ごく普通の会話風の文で 真面目に書くと変だからふざけ気味のものに 気楽に書こうと	どういう手紙にするかについての全体的方針
気軽に 軽くながして つれづれに 思いつくままに	書くときの姿勢
書き出しのお礼を友だちらしくどう書こうか	手紙の形式
「です・ます」をやめようと 言葉使いは凝らないで 言葉使いは適当でいいやと	言葉使い
熱狂をそのまま書いちゃえと 感情を出そうと 感情を出してもいいだろうと 自分のパーソナリティをそのまま出そう 幸せ気分を出しちゃおうと	感情の出し方
冗談を入れよう のろけよう（2例） いかにアホなことをつけ加えようかと 相手（妻）のことをいれようと	入れる内容のプラン
内容の構成を少し考えた	内容の全体的方針

の難易度，表記形態の4下位カテゴリが区別できた。プランには他に感情表現プラン(Pe)，内容のポイントの意識化 (Pp)，表現したい内容の計画 (Pca)，組織化 (Pco) もあり，予想以上に多くのプランが立てられていることが示された。また前プラニング期には表現態度（A）も設定されていることがわかった。なお P7 と P8 はプロトコルからは認められなかった。

次に上記の各カテゴリに分類されたプロトコル数を宛先別に Table 7 にまとめたところ，手紙文産出方略について以下のタイプが区別できた。1. 表現形態プランや検索が多いタイプ（媒酌人宛，同僚宛），2. 表現態度の設定は認められるがプランが比較的少ないタイプ（両親宛，友人宛），3. 表現形態プランは多いが検索が認められないタイプ（甥宛），4. プランが他の宛先に比べて顕著に少ないタイプ(書き手宛)。各タイプは生成された宛先人や手紙文のイメージ（Table 6 の例を参照）に即していると考えられる。すなわち媒酌人と同僚は書き手より社会的に上位であり，その関係が形式的な手紙文のイメージを生成させ，規範的構造や常套句の検索を活発にさせたのであろう。一方両親や友人は書き手にとって親

Table 6. プロトコルの分類カテゴリ，定義，宛先別のプロトコル例

カテゴリ	略号		下位カテゴリ		定義	宛先：例
イメージ生成	I	Ir	宛先人のイメージ生成		読み手との上下関係，親密度や読み手の性格のイメージ化	媒酌人：上司だから……，同僚；仲のよい先輩のイメージで 甥　：いとこを思い浮かべた，どれくらい親しいかを考えた 両　親：一応目上だから……
		It	手紙文のイメージ生成		出来上がった手紙文のイメージ化	媒酌人：失礼にならないよう，始めと終わりを丁寧に 友　人：まじめに書くと変だからふざけ気味のものに
態度	A		表現態度設定		書くときの構えや態度の意識化	両　親：なれなれしくならないように，結婚したから2人単位で話しをするつもりで 友　人：気楽にかこう
プラン	P	Pe	感情表現プラン		どの程度書き手自身の感情や感想を表わすかについての計画	媒酌人：感情はおさえめに 同　僚：感情の表現を口に出して言うようじゃなく書かなくてはと…… 友　人：熱狂をそのまま出す
		Ps	表現形態プラン	手紙文の形式	どの程度手紙文の規範的形式に従って書くかについての計画	媒酌人：形式どおりに 同　僚：始めの挨拶をどのくらい簡単にしたらいいか 両　親：始めの挨拶はやめようと考えた
				言葉使い	言葉使いについての計画	媒酌人：言葉使いを丁寧に，　両親：ある程度の敬語で 友　人：「です・ます」をやめよう，甥　：語りかけるように
				語彙の難易度	どの程度易しい語彙を使うかについての計画	甥　：簡単な言葉で書こう，難しい語を使わないようにする
				表記形態	漢字とかなの割合についての計画	媒酌人：漢字を使えるところは漢字で書こう。知らないと思われると恥かしい 甥　：漢字を少なく，なるべくかなで
		Pp	内容のポイントの意識化		内容のポイントの意識化	媒酌人：ポイントをハワイにしようか，お礼にしようかと 同　僚：お礼を強く打ち出す，両親：旅行の報告として
		Pca	表現したい内容の計画		追加したい内容，表現すべき内容についての計画	友　人：冗談を入れよう，のろけを入れよう 甥　：原地の説明を入れなきゃと……
		Pco	組織化		内容をどう展開するかについての計画	媒酌人：出来事を時間順を書いていこう 友　人：思いつくままに書く，甥：順序だてて書く
	Pl		局所プラン		次に書くべき内容の表現についての計画	媒酌人：(主文の終わりに) 最後の挨拶を丁寧にしなくてはと考えた 甥　：(「カクテル」のところで) 説明を入れなくてはと考えた
検索	R		情報の検索		プランや内容に適した表現の検索	媒酌人：手終文の形式を思い出していた。決まり文句が出てこなくて困った

Table 7.
各分類カテゴリにおける宛先別プロトコル数
(計 243)

カテゴリ	媒酌人	同僚	両親	友人	甥	書き手
イメージ生成	9	9	7	10	10	12
表現態度			4	5		2
プラン	40	29	21	16	35	11
表現形態	17	15	9	4	22	
内容及び感情表現	15	9	9	12	10	11
局所	8	5	3		2	
探索	13	8	2			

ったと推察される。甥については文章の読解能力が考慮されなければならず，書き手が判断した能力に応じたプランが立てられたが，それは知識の探索を必要としなかったのであろう。書き手自身については言うまでもなく，文章の形態についての最低限のプランがあればよかったのであろう。

以上述べてきたように，書き手は宛先に基づく方針やプランを立てて適切な表現を産出している。その一例である書き手の報告と産出された表現を次に示しておく。

報告　甥宛「小さい子なので，やさしく説明する必要ある。言葉をやさしくして，漢字を使わないようにしようと思った」

表現「おさかなや　かい　が　とってもおいしかったのよ　トロピカル　カクテル（おさけだから道夫くんにはわからないでしょ）ものんだの。」

(Fully satisfied with good seafoods
And tropical cocktails served there)

2.　修正例の分析

得られた修正例（204 例）は 8 例を除いてすべて単語しい関係にあるため，事前の周到なプランの必要がなかや表記の修正であった。修正が行なわれるためには，産出された表現がなんらかの基準で評価され，それに適さないとの判断が下されなければならない。その基準を修正前と修正後を比べることによって推定した結果，「プラン」「正確な文字パタン」「意味的文脈の整合性」「その他；基準推定不可能」の 4 つに分類できた。分類名，典型的修正例，宛先別の修正数を Table 8 に示した。同表にみられるように，「プラン」に分類された修正例は表現形態プランの多かった媒酌人，同僚，甥の宛先において主に得られている。このことは語句や表記が局所的な制約だけを受けて生成されるのではなく，宛先に応じて立てられたプランに基づいて生成され評価・修正されていることを示している。ここに P7 と P8 の過程も確認されたといえよう。

議　　論

書き手は宛先に基づく様々な方略やプランを用いてその宛先に適した手紙文を産出している。本研究ではそれらのプランや方略を書き手の内観報告と産出された表現形態の双方から明らかにした。

ところで，本論文における実験 1 と実験 2 では，複数の宛先に書く条件であり，書き手が手紙文の表現の仕方を意識的に順次変化させたために上述の結果が得られた可能性がある。この点については，伊東（1985）において，一つの宛先にのみ書く条件の実験が行なわれ，実験 1 と実験 2 の結果が条件に独立であることが確認されている。

さて上述のように宛先に即した方略がとられ適切な表現が産出されるということは，手紙文を書くことが個人的な表現産出活動というよりは，社会的な表現産出活動であることを意味するものである。したがってその活動

Table 8.　修正例の分類と宛先別修正数

分類		例	媒酌人	同僚	両親	友人	甥	書き手
プラン	表記	まど　→窓	9	2	1	1	19	
	言葉使い	私達　→私共	10	3				
	語彙の難易度	御両親→おとうさんとおかあさん					9	
正確な文字パタン		スリップ†，間違い（具→貝，着→美）	4	9	7	6	3	5
意味的文脈の整合性		午後には夕日が→夕方には夕日が	2	6	2	4	1	3
その他(評価基準推定不可能)		一文削除，結婚式→式，言ったら→言うと	12	15	51	8	6	6

† 手がすべって文字パタンや文字パタンの一部がゆがんでしまった。

このような感覚はどのように獲得され、どのような場合に働くのであろうか。いまどのようなときに規範的な表現には社会的な規範感覚が働いていると考えられる。表現や効果的な表現に関する感覚が働くかを考えてみると，まず読み手が文章を読んだときに持つであろう印象が予測された場合があげられよう。例えば，実験2の媒酌人宛において，「書けるところは漢字で書こう。知らないと思われると恥ずかしい」という報告が得られている。報告の前半は表記形態プランとみなすことができる。そしてそのプランは、かなの多い文章に対して媒酌人が感じるであろう事が考慮され，そのような感じを持たれないように立てられていることがわかる。表記形態プランに限らず，発見された様々な表現プランは宛先人が持つであろう印象を予測して立てられていた（例；甥宛の語彙の易しさプランや媒酌人宛の感情表現プラン）。さらに出来上った手紙文をイメージ化するときや表現態度を設定するときにも，上述のような宛先人の内的反応が考慮されていた。したがって先の感覚が表現の産出に働くためには，読み手の反応が予測され，とろうとする方略やプランの意義づけが行なわれる必要があると考えられる。

さて上記の感覚がどのように獲得されてきたかについては，本研究では直接な結果が得られていない。しかし表記形態に限定して言えば，日本語の表記形態の多様性が表記感覚の獲得や発展に大きく影響していると考えられる。日本語の文章においては，同一の単語でも，そこに漢字を用いるかかな（カナ）を用いるかによって単語のイメージやその単語の指示する内容が異なることがある（例，有り難うとありがとう；人とヒト）。したがって日本人は表記形態の多様な文章に長年接することによって，効果的な表記を選び決定するときに働く感覚の基礎となる知識を獲得していると思われる。

表記の決定過程については，海保・野村（1983）が5段階から成る情報処理論的モデルを提示し，その第2段階においては，漢字表記がふさわしいか否かが判断される。彼等はその判断に影響するものとして，社会的規約に関する感覚と漢字を使うことによる表現効果をあげている。これらの感覚は本研究で認められた感覚と同様のものと考えられ，したがってそれが働く場合には使用される表記によって読み手がどのような印象を単語に対して、文に対して、さらには書き手に対して持つかが考慮されていると考えられる。

最後に，表現内容と表現形態がどのように統合されているかについて考える。本実験においては，内容メモが与えられているにもかかわらず，書き手は内容の展開の仕方や追加内容についてのプランを練っていた。これらの方略は、与えられた内容が書き手と宛先人の関係にふさわしいか否かという規準で再検討されることを示している。したがってそこでも宛先人が持つであろう印象が予測され，その予測に基づく表現感覚が働いたと思われ，この点において表現の内容的側面と形態的側面が統合されて宛先ふさわしい手紙文が産出されたと考えられる。

引用文献

安西祐一郎・内田伸子　1981　子どもはいかに作文を書くか？　教育心理学研究，29，323-332.

伊東昌子　1985　手紙文の産出過程　基礎心理学研究，4，印刷中.

海保博之・野村幸正　1983　漢字情報処理の心理学　教育出版

Scardamalia, M., Breiter, C., & Steinbach, R. 1984 Teachability of reflective processes in written composition. Cognitive science, 8, 173-190.

内田伸子　1982　幼児はいかに物語を創るか？　教育心理学研究，30，211-221.